

「誕生日おめでとう」

時間の感覚を狂わせるほど明るい診察室の蛍光灯の下、医師は不意に、お決まりの挨拶を口にした。

「……ありがとうございます」

患者用のスツールに腰掛けたまま、ぼんやりとリノリウムの床についたキズを数えていた私は、慌てて顔を上げ、言葉を返す。

『コウイチ』と印字された名札を胸につけた初老の医師は、カルテに視線を定めたままだ。パソコンやモニターが置いてあるデスク脇の棚には、患者たちのカルテが整然と並んでいる。

「早速だが、『2011号』、」

そう言って、医師は凹凸のない私の上半身と下半身に素早く視線を巡らせ、再びカルテを見やる。特別な関心も感情もこめられていない、業務的な一瞥だった。

「君は、どちらの性別を選ぶのかな？」

真っ白いカルテの下部には、チェックを入れるための四角マークが二つ並んでいる。医師はまるで「どちらにしようかな」と遊ぶように、右手の人差し指で交互にマークを叩いている。いよいよだと悟った私の全身が、総毛立つ。心臓が早鐘のように打ち始める。身体がぎゅっと緊張し、深く息が吸えない。

カルテを叩く音が止む。

医師はカルテから目を離し、はじめて私の目を見た。

「ひょっとして、まだ、決めていないのかね？」

私は今日、18歳になった。

今日、自分の人生を決めなければならない。

この星の住人は、生まれついた時には性別を持たない。一様に高い声と細面の顔とのっぺりとした身体を持ち、皆ひとまとめで学び、遊び、子ども時代を過ごす。そして18歳で、自分で男か女どちらかの性別を選ぶのだ。

住人は18歳の誕生日を迎えると、星で唯一の病院へ行く。選んだ性別に合わせて「性別選択手術」を受け、私たちは男と女に分かれていく。

「手術は必ず、18歳になった当日に行く。それがこの星のルールだ」

医師は、私の目を見たまま、静かに話し始めた。心臓が再びどきんと早打つ。

「考えるだけの時間は十分にあったはずだ」

医師はそこで言葉を切り、棚にずらりと並んだ患者のカルテを顎でしゃくった。これ以上時間はない、と言いたいのだろう。

ブーンと音が鳴った。

診察室の一角にあるディスペンサーから、殺菌剤が噴射される。

「——自分は——」

意味のある言葉の一片を、腹の底から搾り出す。

「——考えてきたんです、18年間ずっと。友達や家族や先生にも相談しました。色んな人が、色んな答えを返してきました」

「男がいいとか、女になってよかったとか、いろんな助言があったらどう？」

「……自分の心には響かなかったんです」

「心に響くとか、そういう問題じゃない。何かしらの理由や願望、それに基づいて、どちらの性別になりたいか決めればいい」

「理由や願望……ですか」

不意に、診察室のドアが開く。

「そうだ。——おい、『マミ』君」

回診を終えたばかりらしい若い看護師に、医師は声をかける。『マミ』の名札を胸につけた彼女は、「はい先生」と返事をして、『コウイチ』医師のそばに立った。

「君が女を選んだ理由を話してやれ」

看護師は医師の言葉を聞くやいなや、私を眺めた。彼女の白衣からだろう、甘い香水の芳香が漂白剤の匂いに混じって漂ってくる。

「あー、ひょっとして、まだ性別をお決めになっていないとか？」

小鳥がさえずったような高い声。

「そうね〜。たとえば、憧れの人とかいません？ こんな人になりたいって尊敬している人とか、こんな容姿になりたいと思う人とか。今だと、ChicChokerとしても人気の俳優『シオン』君にあやかっ、男を選ぶ人が増えているわ」

「特に……いないです」

「じゃあ責任重大ですね。ふふ」

看護師は両手を頬に軽く当てて、笑った。

淡いピンク色をした10本の爪が、行儀よく彼女の輪郭を彩っている。

私は自分の爪を見た。無色透明をしている。

「女を選んだ理由は単純なんです。好きになった人が男だった、それだけ。私たちは18歳まで性別はないけれど、誰かを好きになったりはするでしょう？ 私みたいに恋愛感情をきっかけに選ぶ人が多いと思うわ」

「自分は、人を好きになったことがないんです。というか正確には、みんな同じくらい好きで、誰かを特別に強く好きだって思うことがなくて」

「本当に？ 誰かに恋をするのは素晴らしいことよ。なら、友達は？ 友情だって理由になるでしょう。この人とずっと親友でいたいとか」

「失礼ですけど、その人とはどうなったんですか？」

「え？」

「お付き合いされたんですか？ まだ、結婚はされていないようですが」

看護師は、咄嗟に左手を隠した。薄いピンクに塗られた唇が、きゅっと歪む。

好きな人のために男になる、女になる。あるいは同じ性別を選んで親友になる。でもそれは未来への期待に基づくものであって、決定事項は何もない。期待が裏切られたと気づいたとき、人は苦しむんじゃないだろうか。

「……結婚したいとか、子どもが欲しいとか、そういう気持ちになることはないの？」

私は首を振った。本当だった。

「じゃあ、仕事で考えたら。私の姉は、子どもの頃からファッションや美容に興味があったから、迷いなく女を選んだわ」

「やりたいことなら色々あります。絵を描くこととか、歌うこととか、文章を書くこととか。でもそれって、性別関係なくできることじゃないですか」

「それは詭弁だ」

それまで黙ってやり取りを聞いていた医師が、会話に割り込んでくる。

私のカルテを手の甲で何度も叩きながら、彼はこう言った。

「この星では個人が性別を選べるが、本当は自由意志なんてものは要らない。決められないなら、周囲が決めればいい。女。女はどうだ。今この星には、女の数が少し足りないからな。データによると女の割合は45%で——」

「そんな決め方はできません、きっと後悔します」

「その時は『性別再選択手術』を受ければいい」

「再選択？ 確か政府の認可を受けるのには、長い時間とお金がかかると聞いています。社会が混乱するから、一度決めた性別はまず変えられないって。だから悩んでいるんです。どうしても、性別を決めないとはいけませんか？」

「どういう意味だ」

言葉を発するたびに大きく上下する医師の喉ぼとけが、なんだか別の星の生き物のように見える。

「このまま生きていくことはできないんでしょうか。男でも女でもない大人。そういう人も、少数ながらいると聞いたことがあります」

「2011号、君は、社会不適合者になりたいのか？ くだらない屁理屈をこねるのはやめて、さっさと決めなさい。社会に適応するには、性別が必要なんだ」

「適応しなければいけないんでしょうか？」

「当たり前だろう。社会に反抗する道を行くというのかね？ 性別がなければ、

名前だって与えられないんだぞ。そんなのは許されない」

医師はカルテから手を離し、大きく息を吐いた。

そしてパソコンのモニターで時間を確認した。14時ちょうどを指していた。

「もう時間だ。この際、コインでも投げて決めなさい」

「待ってください。先生は……先生は、どうして男を選んだんですか？」

「なんだと？」

「女でも医師にはなれますよね。それとも、好きな女性がいたからですか？」

「バカらしい」

医師は、横に立つ看護師を見て、さもありなんといった表情を浮かべる。

「出世したいなら、どんな職業であれ、男じゃなきゃ話にならん」

「——」

ただ、自分らしくありたい、そう思った。

私の選択、私の人生。

本当は、ずっとずっと前から分かっていたはずだ。

「もう十分だろう。——おい、『マミ』君！ 手術の準備だ」

私は立ち上がる。

——どちらの性別にも属さない私というものを。